
午前七時十二分発

ひい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

午前七時十二分発

【Nコード】

N5360B

【作者名】

ひい

【あらすじ】

朝七時十二分発のバスに、僕は大好きなキミに会うために今日も乗る。『僕』の目線で物語が進む、せつない恋のお話です。

朝七時十二分発のバスに揺られて三十分。

僕の一日の生活の中で一番幸せな時間だ。

この時間を過ぎると僕の一日は、何の面白みのない平凡な一日になる。

それはまるで、毎日全く味のしない料理を淡々と食べているようだ。

美味しいのか不味いのか感じない。ただ単に『食べる』という行為を行うだけ。

そんな味気ない僕の人生に、彼女は『美味しい』という感覚を教えてくれた。

今日も彼女を一目見ようと、僕はあのバスに乗る。

……あ、いた。

彼女はいつも、一番後ろの向かって左側の席に座っている。何度も見かけているが、他の席に座ったところを見たことがない。

だから僕も決まって一番後ろの右側の席に座る。

彼女と話をしてみたい。

そんな願いを叶えることなんて、未だに彼女の顔を真正面から見ることがない僕には到底無理な話だ。

こんな小心者の僕は彼女の横顔を、読んでいる文庫本の間からちらつと見ることにしか出来ない。当然、そのときの僕に本の内容なんてこれっぽっちも入っていない。

彼女の横顔しか分からないが、僕が見る限り彼女は美人だ……と思う。

鼻筋は通っていて遠くからでも分かるくらい、まつげは長く細い。髪も染め上げた造りものの色じゃなく、自然な栗色。肩を越す長さで彼女が俯くと、髪のカートンが彼女の顔を隠してしまう。その度に細く白い指が長い髪を耳に掛ける。

おそらく彼女は気付いていないだろう。自然と彼女から零れ落ちる清楚な甘い空気が、僕の中に眠る獣を呼び起こしていることを。

彼女と話をしてみたい。

そんな段階の願いでは僕の気持ちは抑えきれず、彼女を自分のものにしたいと、いつしか願うようになった。しかしそう強く願うたびに、彼女に拒まれないかと、僕の恐怖心が見え隠れする。

正直、自分でもこんなに弱い男だったなんて驚いている。どうしてだろう、彼女を目の前にするだけで、僕は何も出来ない臆病者になる。

けれど、願ってばかりじゃ何も叶わない。

……そんなこと、痛いほど分かってるんだ。

僕はひとつ溜め息をついた。

……もし。

もし、彼女から話しかけてくれたら僕は……。

神様が願い事を叶えてくれる、そんなおとぎ話を信じてた自分は、遠い昔に置いてきたと思ったのに。都合が悪くなると、見たこともない神様にすがってしまう自分にちよつと笑ってしまう。

ふと気が付くと、窓の外の風景が僕の学校近くの住宅街に変わっていた。そろそろ、この甘い時間を食べ終わらないといけない。

僕がバスの停車ボタンを押したとき、そばに置いていた文庫本が僕の足下に落ちた。

……はあ。

それを拾いあげようと体を屈めたが、バスが左に大きくカーブした。落ちた文庫本は、それが必然と言わんばかりに、ずらずと右に流れていった。

僕は待て待てと、文庫本を目で追っていると、白い柔らかそうな手が僕の本を拾い上げた。刹那、その手の主を僕は簡単に想像することができた。

「はい」

「あ、ありがとう」

このとき、僕は初めて彼女の顔を真正面から見た。僕の思ってた通り、彼女は美人だ。

「この本、面白いですよね」

「え、あ、そ、そうなの？」

「……読んでるんじゃないんですか？」

「あ……」

口が引きつった僕の顔を、彼女は啞然とした様子で見ている。

彼女から話しかけてもらえるなんて、微塵にも思っていなかった僕は失態を見せてしまったのだ。こんなことなら、真面目に読んでおけば良かった、なんて今さら遅い後悔をする僕。きつと変な男と思われたに違いない。

僕は恥ずかしくて穴に入りたい気持ちになった。出来るだけ大きな、深い深い穴に入りたい。

こうして後悔の渦に巻かれていた僕を、彼女は声をあげて笑った。

「面白い人なんですね」

それからしばらくして、バスは僕の学校の前に停まり、僕はバスから降りた。バスはゆっくりとスピードを上げていき、彼女を乗せて僕の前から姿を消した。

『面白い人なんですね』

彼女の透明な声が僕の耳の奥で響く。
目を閉じると彼女の笑顔が浮かぶ。

僕は今ここで、決して何も恐れないと誓おうと思う。
彼女のあの笑顔が僕だけに向けられるように。
僕以外の男が彼女の甘い空気に気が付く前に。

確かに彼女のことを考えるだけで、今も僕の小さな小さな心臓は、
ぎゅゅと苦しそうな悲鳴を上げる。

けど今までに体験したことがない、この胸の痛み、痛いのに甘い
感覚。

この大切な想いを守るために僕はもう恐れない。

明日も僕はあのバスに乗る。
さて、キミと何を話そうか。

おわり

（後書き）

いかがでしたか？

今までの作品より、主人公の気持ちをもっと掘り下げて書いてみました。：ちゃんと掘り下げたようになってるか、かなり不安です（；

ー）

ちなみに私が学生だったころ、バスの中でカッコいい人を見る度にきゃーきゃー言っていました（笑）

ご感想など頂けると嬉しいです。最後までお付き合いくださり、ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5360b/>

午前七時十二分発

2010年11月26日06時48分発行